

妖怪の誕生*

——『山海経』における霊異な動物——

劉 宗 迪**

訳 陸 薇 薇***

解説

本稿は2020年7月に中国の『開放時代』¹⁾という学術誌に掲載された論文の日本語訳である。著者の劉宗迪は民俗学や神話学、歴史学などの学問領域で活躍している学者であり、特に『山海経』の研究で名が高い。南京大学の大気物理学科を出た後、北京師範大学の文学研究科などに進学したため、自然科学と融合した文理学的な研究を行うことができる。そして、中国の古典文献学の基礎がしっかりしているだけでなく、英語にも堪能で、カントやマルクス、ハイデガー、ベンヤミン、フーコーなどの西洋思想家の理論を熟知している。いわゆる東洋と西洋の境界を超えられる理想的な研究者である。日本民俗学を研究している訳者にとって、劉宗迪には、どこか南方熊楠の面影がうかがえるところがある。

まず、劉宗迪の代表作である『忘れられた天書——「山海経」と古代華夏の世界観』について少し紹介したい。647頁にもおよぶ大著の中で、劉は今まで『山海経』を妖怪書物や博物誌としてしか扱えなかった研究と違う道を探っている。彼は『山経』と『海経』をわけて理解する必要があると指摘し、『海経』の解釈に重きを置いた。劉宗迪によれば、『海経』のテキストには、天文歴法についての描写があるが、後世の人が天文図を地形図と誤読したため、『海経』の真意を読み取れ

なかった部分があるという。そして、劉は天文図の解説に止まらず、その図を通して、現代人にとって疎遠なものとなっている古代華夏の知的システムや世界観を再現しようとした。それは『海経』に書いてあることをひたすら歴史・地理的に考証するような研究や、古代人の怪異的でプリミティブな思想の表れとして『山海経』を見る人類学的な研究とは、一線を画する研究である。言い換えれば、劉宗迪に天文学と地理学の知識の蓄積や、民俗学的な視点があるからこそ、新たな発見と独自の再解釈ができたと考えられる。

そして、本稿「妖怪の誕生」は、『忘れられた天書』の延長線上に位置づけられる研究である。劉宗迪は、今度は『山経』のほうに注目した。『山経』にある実証的な資料を利用して、妖怪がいつに誕生したのかという問題を解明しようとした。妖怪を通して人間の精神構造を捉えようとするマクロ的な研究に対して、劉の研究は、ミクロ的な妖怪発生学的研究と言える。劉宗迪から見れば、『山海経』における霊異な動物に関する記載は、上古時代の人が自然災害との戦いの中で身につけた予兆知識であり、その中には「科学的」なものもある。しかし、違うコンテキストにいる後世の人は、それが科学の萌芽だったことを理解できなくなり、ひたすら玄学²⁾の文脈で動物を象徴的な存在として取り扱っていたため、妖怪の誕生

*キーワード：妖怪、禎祥、『山海経』、『五行志』

**中国・北京語言大学人文学院教授

***中国・東南大学外国語学院准教授

1) 『開放時代』は中国で最も影響力のある人文・社会科学系の総合学術雑誌の1つである。2013年に東京大学において、「中国の〈いま〉と人文学—『開放時代』との対話を通じて—」というワークショップが開かれたことがある。

2) 玄学（げんがく、Neo-Daoism）とは、中国の魏晉南北朝時代に隆盛を誇った哲学思潮で、主に「三玄の書」と称せられた『易経』『老子』『莊子』の解釈をする学問を指す。

を呼んだのである。

ところで、近年、日本の妖怪ブームは世界を席卷している。中国の研究者たちは井上円了、柳田国男、小松和彦などの妖怪研究に大変関心を持っているので、昨年、小松和彦の『妖怪学新考』を中国語に翻訳させていただいた。その一方、劉宗迪のこの論文を紹介することにより、日本の研究者に中国の妖怪研究に目を向けていただき、両国の学術交流が深まることに期待したい。

最後になるが、劉宗迪は欧米の理論に精通しているにもかかわらず、現代流行りの論文の書き方にはあまりこだわらない。つまり、あまり欧米の理論を直接引用したりはしない。が、ところどころ欧米思想との対話を意識したうえでの表現が見られる。それに、劉宗迪の中国語の表現は、いつも洗練された美しさと優雅さに満ちている。しかし、残念ながら、訳者にはその美しさを十分伝えられる能力はない。中国語が読める方には、ぜひ原著論文をご覧になっていただきたい所存である。

はじめに

近代の世界は啓蒙主義や近代科学によって脱魔術化された世界である。この世界では、自然界における生きとし生けるものや森羅万象は、すでに一つ一つ命名・分類・説明されている。すべてのものにはそれぞれの名前や属性、位置づけがあり、お互いに干渉や混ざり合いはしない。例えば、狐は哺乳類、蛇は爬虫類、フクロウは鳥類、蛙は両生類であるが、万物の霊長である人間は霊長類に属する。万物はおのの自分の種類に従い、自然の進化過程と分類秩序において自分なりの位置を占めている。

そして、この世界では、造物主の加護もなければ、妖怪・怪異の登場もない。すべてのものには定められた命の旅があり、めいめい自然の法則に従って繁殖し、生老病死をたどっていく。人間が世を去ると幽霊にならないし、狐、蛇、カエルなどは姫様や王子様に変身しない。フクロウの鳴き声も災難や死亡を招かない。生と死、人間と動物、生き物と無生物には、それぞれ自分の縄張りがある。しかも、あいだの境目がはっきりとして

おり、重なり合うことは決してない。

さらに、この世界では、自然の法則が隅々まで浸透しているので、奇跡もなければ、異常もない。あらゆる災難、病気、怪異は、自然科学の原理によって明確に解釈され、しかも決まった答えになっている。これはいわゆる自然科学によって全面的に定義・分類・規律訓練された世界である。

近代科学の教化のため、このような世俗的な世界観はすでに人々の心に植え付けられている。わたしたちはとっくにこの世界に慣れてしまい、「世界は昔からこのような様子だった」「これこそ世界の真相だ」と思い込んでしまっているのである。実際には、この明らかで定かな世界は、せいぜい数百年の歴史しか持っていない。啓蒙運動が始まる前、すなわち、近代科学が自然世界と人間の精神世界に対して全面的に計画し規律訓練する前に、世界はまだ別の姿だった。人々はまったく違う世界観で、自分がいる世界や自分と共存している万物を見たり、理解したりしていた。

当時の世界は、まだ科学の光に照らされていないし、広げられた地図のように人々に一望に収められるものでもなかった。その世界は神秘のベールに包まれており、神様や造物主は世界の背後に姿を隠すか、世界を俯瞰する場所に居られ、造物の秘密と万物の運命を握っていた。大自然はまだ完全に開かれた本ではなく、人々の察知や読解、体験を楽しみにしている書物だった。走獸飛禽、草木花卉、霹靂閃電、日月薄蝕、生成毀敗など、様々な自然の事物・現象は、造物主がその本に残した印と言える。そして、そういう印には、造物の秘密と神様の指示が潜んでおり、人々からの発見や理解を待っていた。

そのうえ、それらは単なる自然の事物や現象ではなく、深い意味を秘めた象徴と兆候である。狐、蛇、フクロウはただの動物ではないし、雷電風雨、日月薄蝕、流星墜落、彗星経天なども単純な自然現象だけではない。兆候として、自分とまったく違うものを指したり、あまり知られていない神秘的なものを示したりしていた。日食や月食は政治的動乱を予兆するかもしれないし、流星や彗星は戦争の勃発を暗示するかもしれない。狐、蛇などの生霊も人に変身できれば、人もなくなっ

たらただ灰になるのではなく、幽霊や鬼に変身し、時にはこの世を訪れ、彼岸のメッセージを伝えに来る。

その世界では、人と獣、生と死、天と地、有生と無生、自然界と人間界、物質と精神、此れと其れなどの間には、超えられないはっきりとした境はなかった。人間は鳥獣に変身できるし、鳥獣も人間に変身できる。星像は政治に影響をもたらすかもしれないし、政治も天変をもたらすかもしれない。突然現れた鳥獣は、もしかしたら災害や洪水の予告となり、恒常的な社会秩序に大きな衝撃を与えるかもしれない。

普段の秩序から逸脱し、物事の常態を打ち破り、自己同一性を超えるような、特に社会秩序に驚き・混乱をもたらすような異常な物事と現象は、昔の人々にとって、「変怪」または「妖怪」であった。『左伝』には「天反時爲災、地反物爲妖、民反德爲乱、乱則妖災生」と書いてあるように、「妖」「災」「乱」とは、天時、地勢、人の常に逆らう異常な物事や現象のことである。

昔の人々は、そのような条理に反する現象が天災・人災を招いたり、人間に災難をもたらしたりすることを信じていた。一般的に言うと、「妖怪」とは、物事が元来の属性を乗り越え、自分自身でないものに転化したり、本来の属性ではない属性を獲得したり、自分の固有能力を超えた結果を引き起こしたりする現象のことであり、しかもその結果はしばしば有害的で、さらには災難的である。

近代世界においては、科学精神と合理主義の世界観はすでに蔓延している。しかし、その一方、神や妖怪が出現する前近代的世界観もまだ姿を消していない。今でも民間では、特に都市部の教養人から離れた辺鄙な田舎や山奥の谷間では、妖怪はよく野人・郷民の夜の雑談に登場する。幽霊や妖怪はいまだに生き生きと語り継がれ、体験されている。野外で突然遭遇する生霊、深夜に響くわけのわからない音、荒野に現れるほんやりとした

影、夢に思いがけぬ出る亡霊などは、依然として人々の合理的な考え方に困惑をもたらしたり、人々の精神世界を揺るがしたり、ひいては人々の体を痛ませたりする。そして、そのような現象はしばしば経験者によって、「幽霊」や「お化け」と名づけられる³⁾。世界の多くのところに、特に人間性の奥深いところには、今もなお、科学の光に照らされていない魑魅魍魎が棲む片隅がある。

啓蒙主義や合理主義を背景にできあがった民俗学は、誕生の日から鬼や妖怪、幽霊などの「鬼学」、あるいは「妖怪学」に注目してきた。鬼や妖怪、幽霊などは、客観的な実体としては存在せず「架空」なものだが、観念としては長く伝承されてきた精神的な「実在」と言える。そして、その観念を研究することによって、伝統や庶民の精神世界の微細なところまで理解できると考えられる。

したがって、今日に至るまで、その観念や、観念と関連する儀礼や実践を中心とした「民間信仰」研究は、民俗学の最も重要な研究内容の1つである。妖怪学や民間信仰の研究は歴史が長い。妖怪、鬼、神霊といった観念の「発生」という大事な問題に対して、まだ深く、かつ共感的な理解は得られていない。その問題に触れる際、「アニミズム論」(及び「トーテム崇拜」、「原始思想」)のような時代遅れの空虚な論じ方が持ち出されるのみである。

「アニミズム論」は「野蛮人や田舎人は合理主義的な世界観に欠け、世間の万物を本質的に見る事ができない。彼らは動物や植物、木器・石器などの物には人間と同じよう魂が潜んでおり、しかも魂と魂は霊性を通じて相互作用できると信じている」⁴⁾と唱えている。

確かに、妖怪・鬼神観念の本質は、鳥獣、草木、木石などの自然物が他の物に通じたり、異常現象をもたらしたりする霊性を持っているのを信じることにある。しかし、実際には、草創期の人類学のいわゆる「アニミズム論」は、妖怪や鬼神

3) 現代文明が発達している日本においても、山奥の住民は山の中でまだ狐、蛇、お化けなどに会えると思っている。田中康弘は地元の人と言う狐、蛇、お化けなどは山の中の地理・気象の変化による異常現象や意外な経験にすぎないということを、調査を通して明らかにした。田中康弘『山怪』、黄曄訳、天津人民出版社、2018年を参照。

4) [英] エドワード・タイラー『原始文化』、謝継勝など訳、广西師範大学出版社、2005年、383-384頁。

観念の発生学的解釈というより、妖怪や鬼神観念の現象学的帰納にすぎなかった。すわなち、「アニミズム論」は別の言い方の妖怪観、鬼神観にすぎなかったのである。

ところが、妖怪や鬼神などの観念についてよく説明しなければならないのは、野蛮人や田舎人がなぜ動物や植物、そして木器・石器に魂か霊性があると信じていたのかということである。つまり、説明が必要なのは、「アニミズム論」そのものである。

「世の中にはそもそも妖怪は存在していなかった。妖怪は古代人・民間人の不思議な物事や異常現象への誤謬に満ちた想像にすぎない。昔の人々は不思議な物事には独特な神通、異常現象には神秘的な意味合いがあると考え、そのようなことは変故や災難を招いたり予兆したりすると信じていた」というのは、近代科学的な世界観に基づいた解釈である。しかし、重要なのは、なぜ昔の人々の心の中で、ある特定の物事・現象しか神通力や神秘的な意味合いを持っていなかったのか、つまり、なぜ特定の物事・現象しか妖怪にならなかったのかを明らかにすることである。

それゆえ、妖怪発生学においては、なぜ昔の人々が世の中に妖怪がいると信じていたのかを解釈するのみならず、なぜ彼らがほかの物事・現象ではなく、「この」物事・現象だけを妖怪視していたのかをもきちんと解釈しなければならない。要するに、どのようなきっかけやコンテクストによって、ある物事・現象が自分の役割以上のほかの物事・現象と結びつき、別の物事・現象、あるいは出来事および災難を指す印となったのかを究明しなくてはいけない。そのためには、妖怪発生学的な研究は、具体的な資料と事件の分析から出発する必要がある。

『山海経』、特にその中の『山経』の部分は、妖怪発生学の研究に豊富で信憑性の高い具体的な資料を提供できると思われる。『山海経』は『山経』と『海経』との二つの部分から構成されており、その中の『海経』は一枚の版図に対する叙述であ

る。それは四海の外の周辺世界における多くの国や民族、山川、神異について記述した古い「周辺民族誌」と見なされてもいい。その一方、『山経』は現地調査を踏まえて、東、南、西、北、中の5つの方向から、500近くの山の中の数百種類の動物や植物、鉱物、薬物などの物産と、それらの形や機能を忠実に記述した実証的な自然博物誌である。

『山経』に記録された数百種類の自然物の中で、一部の動物はことに注目を集めている。そのような動物が姿を現わすと、旱魃、疫病、戦争などの天災人災が必ず起こる。例えば、長右は「見則郡県大水」、猾褊は「見則天下有大繇」、黿鳥は「見則天下大旱」（『山経南山・南山』を参照）⁵⁾。こうした、いったん現れたら（「見則」の「見」＝「現」）災害をもたらすことになるような鳥獣は、『山経』の中で全部で50種類以上ある。言葉の変化のゆえに、現在、名前だけでは一体どのような動物なのかを判断できなくなっているが、『山経』においては、それらの動物について緻密に生き生きと描かれているため、古代人が自らの目で見た実際に存在していた動物で、決して架空の話や捏造されたものではないことがわかる⁶⁾。

それに、そうした鳥獣は典型的な霊異な存在であり、本来の意味での「妖怪」である。だから、『山経』における記載は、昔の人々の霊異なものに対する経験と観念を忠実に反映したものと言える。

『山海経』という書物は非常に長い歴史を持っており、戦国時代以前に書かれたものと見られる。そのため、中に記されている知識や観念、言葉などは、ある意味では、戦国時代に隆盛した玄学思想に「汚染」されず、本当の経験や知識の特色を保つことができたものだと思われる。そして、『山海経』の記載を通して、われわれは今一度妖怪たちの最初の誕生地に戻って、妖怪発生メカニズムをうかがうことができる。

5) 本稿に引用されている『山海経』の内容は、すべて『宋本山海経』復刻版（国家図書館出版社、2017年）によるものである。

6) 劉宗適「怪物是如何煉成的」（怪物はいかに作られたのか）、『読書』2018年第5期。

一、災難と兆候：『山經』における靈異に関する記載

疫病を招くことになる動物が全部で51種ある。わかりやすく説明するために、以下の通り、一覧表にまとめた。

『山經』には、出現したら洪水や旱魃、戦争、

番号	編章	山の名前	記述	動物名	見則……
1	南次二經	櫃山	有獸焉，其狀如豚，有距，其音如狗吠	狸力	見則其縣多土功
2		櫃山	有鳥焉，其狀如鴟而人手，其音如瘳	鴟	見則其縣多放士
3		長右之山	有獸焉，其狀如禺而四耳	長右	見則郡縣大水
4		堯光之山	有獸焉，其狀如人而彘鬣，穴居而冬蟄	猾褊	見則縣有大繇
5	南次三經	丹穴之山	有鳥焉，其狀如雞，五采而文	鳳皇	見則天下安寧
6		雞山	其狀如鰐而彘毛	鰐魚	見則天下大旱
7		令丘之山	有鳥焉，其狀如梟，人面四目而有耳	鴈	見則天下大旱
8	西次一經	太華之山	有蛇焉，六足四翼	肥螭	見則天下大旱
9	西次二經	女床之山	有鳥焉，其狀如翟而五彩文	鸞鳥	見則天下安寧
10		鹿台之山	有鳥焉，其狀如雄雞而人面	鳧	見則有兵
11		小次之山	有獸焉，其狀如猿，而白首赤足	朱厭	見則大兵
12	西次三經	崇吾之山	有鳥焉，其狀如鳬，而一翼一目，相得乃飛	蠻蠻	見則天下大水
13		鐘山	化為大鵩，其狀如鵩而黑文白首，赤喙而虎爪，其音如晨鵩	欽鵩	見則有大兵
14		鐘山	化為鵩鳥，其狀如鵩，赤足而直喙，黃文而白首，其音如鵩	鵩	見則其邑大旱
15		泰器之山	狀如鯉魚，魚身而鳥翼，蒼文而白首，赤喙	文鯉魚	見則天下大穰
16		槐江之山	有天神焉，其狀如牛，而八足二首馬尾，其音如勃皇		見則其邑有兵
17		玉山	有獸焉，其狀如犬而豹文，其角如牛，其音如吠犬	狡	見則其國大穰
18		玉山	有鳥焉，其狀如翟而赤，是食魚，其音如錄	勝遇	見則其國大水
19		章莪之山	有鳥焉，其狀如鶴，一足，赤文青質而白喙	畢方	見則其邑有訛火
20	西次四經	邽山	魚身而鳥翼	羸魚 ⁷⁾	見則其邑大水
21		崦嵫之山	有鳥焉，其狀如鴟而人面，雉身犬尾	[設] ⁸⁾	見則其邑大旱
22	北次一經	獄法之山	有獸焉，其狀如犬而人面，善投，見人則笑，其行如風	山獬	見則天下大風
23		渾夕之山	有蛇一首兩身	肥遺	見則其國大旱
24	北次三經	景山	有鳥焉，其狀如蛇，而四翼、六目、三足	酸與	見則其邑有恐
25		毋逢之山	有大蛇，赤首白身，其音如牛		見則其邑大旱
26	東次一經	杳狀之山	有鳥焉，其狀如雞而鼠毛	蜚鼠	其邑大旱
27		豺山	有獸焉，其狀如誇父而彘毛		見則天下大水
28		獨山	其狀如黃蛇，魚翼，出入有光	蜺蜺	見則其邑大旱
29	東次二經	空桑之山	有獸焉，其狀如牛而虎文，其音如欽	軫軫	見則天下大水
30		餘峨之山	有獸焉，其狀如菟而鳥喙，鴟目蛇尾，見人則眠	玃狻	見則螽蝗為敗
31		耿山	有獸焉，其狀如狐而魚翼	朱獳	見則其國有恐
32		盧其之山	其狀如鴛鴦而人足	鴛鴦	見則其國多土功
33		姑逢之山	有獸焉，其狀如狐而有翼，其音如鴻鴈	獬獬	見則天下大旱
34		磤山	有獸焉，其狀如馬，而羊目、四角、牛尾，其音如獬狗	崑崙	見則其國多狡客
35		磤山	有鳥焉，其狀如鳬而鼠尾，善登木	絜狗	見則其國多疫
36	東次四經	女烝之山	其狀如鱧魚而一目，其音如歐	薄魚	見則天下大旱
37		欽山	有獸焉，其狀如豚而有牙	當康	見則天下大穰

7)「羸魚」は宋の時代のバージョンでは「羸魚」と書かれてある。郭璞は「音螺」と注釈をつけたが、「羸」と書くべき。

8)現在のバージョンではこの鳥への言及はない。伝承された過程で落とされたと考えられる。郭璞の注釈を参考に、一応鳥の名前を「設」にした。

38	子桐之山	其狀如魚而鳥翼，出入有光，其音如鴛鴦	鰭魚	見則天下大旱
39	剡山	有獸焉，其狀如鼯而人面，黃身而赤尾，其音如嬰兒	合窳	見則天下大水
40	太山	有獸焉，其狀如牛而白首，一目而蛇尾	蜚	見則天下大疫
41 中次二經	鮮山	其狀如蛇而四翼，其音如磬	鳴蛇	見則其邑大旱
42	陽山	其狀如人面而豺身，鳥翼而蛇行，因如叱呼	化蛇	見則其邑大水
43 中次三經	敖岸之山	有獸焉，其狀如白鹿而四角	夫諸	見則其邑大水
44 中次九經	蛇山	有獸焉，其狀如狐，而白尾長耳	狔狼	見則國內有兵
45 中次十經	複州之山	有鳥焉，其狀如鴟，而一足蛇尾	跂踵	見則其國大疫
46 中次十一經	豐山	有獸焉，其狀如蜎，赤目、赤喙、黃身	雍和	見則國有大恐
47	樂馬之山	有獸焉，其狀如匯，赤如丹火	狻	見則其國大疫
48	倚帝之山	有獸焉，其狀如猼，白耳白喙	狙如	見則其國有大兵。
49	鮮山	有獸焉，其狀如膜大，赤喙、赤目、白尾	豸即	見則其邑有火
50	曆石之山	有獸焉，其狀如狸，而白首虎爪	梁渠	見則其國有大兵
51	幾山	有獸焉，其狀如鼯，黃身、白頭、白尾	聞獐	見則天下大風

ある鳥獸の出現が洪水や旱魃、疫病、戦争などの天災人災をもたらすことになるというのは、常識外れのことであるため、登場した鳥獸は自然に霊異なものや妖怪に見なされてしまう。

しかし、そのような記録を科学的な視点から見れば荒唐無稽で、人を欺く怪談のように見えるが、民俗学的な視点から見る場合、理解できないこともない。なぜなら、そこに表現されているのは、伝統的な知識における予兆の観念で、すなわち動物の異常な行動や珍しい異常現象を通して天災人災を予知できるとする考え方だからだ。今でも、民間の気象や季節、農業の諺には予兆の知識が含まれており、『山海経』の中の知識と一貫していると言える。

例えば、「ドジョウが跳ねると雨が降る」、「ツバメが低く飛んだり、ヘビが道に出たり、アリが引っ越しをしたりすると雨が降る」、「カササギが巣を高くすると、その年に雨が多い」などの諺は、「長右は『見則郡県大水』、猾褊は『見則天下有大繇』、鴈鳥は『見則天下大旱』」といった『山海経』の中の記載と通じ合うところが多く、どちらも「近きを以て遠きを推し、一を以て万を知る」のように、観察しやすい現象（動物の異常な行動や突然の出現など）を通して天気の変化を予知する考えの反映である。

『山経』に記録されている51種の兆候動物のうち、獸は24種、鳥は16種、蛇は6種、魚は5種がある。その中、瑞兆と見られるのは鳳皇（見則天下安寧）、鸞鳥（見則天下安寧）、文鯨魚（見則

天下大穰）、狡（見則其國大穰）、当康（見則天下大穰）の5種類だけで、その他の46種類は「災難」の前兆となる。昔の人々は災害を予測したり、災害を防いだりする能力が低かったため、彼らにとって、災害はしばしば死亡を意味するものでもあった。したがって、彼らは恐怖心と戦いながら、災害の兆候について注意深く観察していた。それで、災害予兆に関する知識をたくさん身につけたはずである。『山経』の中の記録は、その氷山の一角にすぎないだろう。

46種類の災難の前兆となる動物のうち、旱魃（大旱）を予兆するのは13種類、洪水（大水）は8種類、疫病（大疫）は4種類、戦争（大兵）は7種類、労役（土功）は2種類、国患（国有大恐）は3種類があり、そのほか、蝗害（蝗灾）、火災（訛火）、強風（大風）、労役（大繇）、追放される人が増える（多放士）、狡猾な人が増える（多狡客）のを表すのがそれぞれ1種類ある。そこから、当時、旱魃や水害、疫病は人々がもっとも恐れる自然災害だったが、戦争と労役は人々が一番よく遭わされる人災だったということがうかがえる。

実際、前近代社会においては、水害、旱魃、疫病、戦争、労役などは人々にとって、つねに現れる可能性のある恐ろしい黒雲のような存在であった。そして、それは科学技術が発達した現代社会においても、完全に避けられるようになったわけではない。

二、靈異には「科学」あり

『山経』の中における「〇〇動物が現れたら（「見則」）洪水、旱魃、疫病、戦争が起こる」という表現は、そもそも素朴な予兆知識にすぎなかった。それは〇〇動物の突然の出現とある災害との間の関連性や同時性を意味するだけで、動物と自然の間に神秘的な感応や因果関係があると昔の人々が信じていたのを意味するのではない。

ある動物が洪水、旱魃、疫病、戦争などを招くというのは、「鶏が鳴くと太陽が目覚める」と似たような言い方で、特に太陽が鶏に起こされたのを意味するわけではない。実際には、そのような予兆の知識は古代博物学の重要な部分である。『山経』におけるそれに関する記録は、作者の勝手な創作ではなく、郷土の知識に対する調査に基づいた記述であり、したがって経験的な根拠と科学的な意味合いがあると考えられる。

『山経』にある予兆に関する記載の「科学性」を説明するために、その中で最も多く見られる「洪水」と「旱魃」の前兆となる動物を、例にとって分析してみたい。

まず、「見則大旱」（出現したら旱魃になる）の動物は13種類ある。

- 1 鰐魚 其狀如鰐而鼯毛
- 2 鴈 有鳥焉，其狀如鴈，人面四目而有耳
- 3 肥蠃 有蛇焉，六足四翼
- 4 駿鳥 其狀如鴟，赤足而直喙，黃文而白首，其音如鴟
- 5 [設] 有鳥焉，其狀如鴟而人面，蝨身犬尾
- 6 肥遺 有蛇一首兩身
- 7 (失名) 有大蛇，赤首白身，其音如牛
- 8 蜚鼠 有鳥焉，其狀如雞而鼠毛
- 9 蜚蠊 其狀如黃蛇，魚翼，出入有光
- 10 獬豸 有獸焉，其狀如狐而有翼，其音如鴻鴈
- 11 薄魚 其狀如鱧魚而一目，其音如歐
- 12 鰐魚 其狀如魚而鳥翼，出入有光，其音如鴛鴦

13 鳴蛇 其狀如蛇而四翼，其音如磬

そのうち、獸類は1種（獬豸）、鳥類は4種（鴈、駿鳥、設、蜚鼠）、魚類は3種（鰐魚、薄魚、鰐魚）、蛇類は5種（肥蠃、肥遺、大蛇、蜚蠊、鳴蛇）がある。

次に、「見則大水」（出現したら洪水になる）の動物は9種類ある。

- 1 長右 有獸焉，其狀如禺而四耳
- 2 蜚蜚 有鳥焉，其狀如鸞，而一翼一目，相得乃飛
- 3 勝遇 有鳥焉，其狀如翟而赤，是食魚
- 4 羸魚 魚身而鳥翼
- 5 (失名) 有獸焉，其狀如夸父而毳毛
- 6 輪輪 有獸焉，其狀如牛而虎文，其音如欽
- 7 合窳 有獸焉，其狀如毳而人面，黃身而赤尾
- 8 化蛇 其狀如人面而豺身，鳥翼而蛇行
- 9 夫諸 有獸焉，其狀如白鹿而四角

その中、獸類は6種（長右、輪輪、合窳、夫諸、化蛇及び名を失った獸1種）、鳥類は2種（蜚蜚、勝遇）、魚類は1種（羸魚）がある。「化蛇」の名前には「蛇」が入っているから蛇類に見えるが、実は蛇ではない。『山経』の記述によると、化蛇は人の顔とオオカミの体、そして鳥の翼を持っており、歩き方が蛇のようであるという。つまり、歩き方以外は蛇と無関係であることがわかる。「オオカミの体」は「化蛇」がオオカミのような獸類であることを示している。「蛇のような歩き方」というのは蛇ではないことを暗示している。本当に蛇だったら、逆にその説明が要らなくなるからである。総じていえば、「化蛇」は獸類が化けた蛇か、蛇が化けた獸類を指すと思われる。

「類は友を呼ぶ、類を以て集まる」（『周易・系辞伝』）。一般的に似たような種類の動物は習性も生活環境も、さらには環境変化に対する反応も似ている。

さて、『山経』の記録には、近縁動物の自然災害に対する反応の類似性が見られるのだろうか。

「見則大旱」の部分に出た動物を、「見則大水」の部分に出た動物と比較してみよう。

	獣	鳥	魚	蛇
見則大旱	1	4	3	5
見則大水	6	2	1	

「見則大旱」の場合は蛇類が多く、鳥や魚類も少なくないが、獣類は1つしかない。それに対して、「見則大水」の中では蛇類は見られないし、鳥や魚類も比較的珍しいが、獣類は圧倒的に多く、6種類にも達する。特に興味深いのは、蛇類と獣類が洪水と旱魃の2つの状況の下では正反対になっているということである。蛇類は旱魃の時よく見られるが、洪水の場合はまったく見られない。その一方、獣類は洪水の時よく姿を現わすが、旱魃の時期にあまり出現しない。

要するに、旱魃によく出てくる蛇類は、旱魃と正の相関関係にあり、それゆえ、洪水の時は現れない。『山経』の「見則大水」の記録に蛇がまったくないのはそのためである。同じように、獣類は洪水と正の相関関係を持っているので、旱魃の場合あまり登場しない。「見則大旱」の記録に獣類が1つしかないのは、逆に獣類と洪水との相関関係を証明してくれている。

また、蛇類の「見則大水」の記載は『西山経』、『北山経』、『東山経』、『中山経』の数編にも見られ、獣類の「見則大水」の記載は『南山経』、『東山経』、『中山経』の諸編にも出てくる。記載はそれぞれの地域と深く関わっているため、各地の洪水や旱魃の予兆知識は、その土地の人が独立して観察した結果であると言える。それは予兆知識が確かに古代人の長期にわたる経験によって蓄積されたものであり、根拠のないでたらめなものではないことを証明してくれている。古代人の自然との長い付き合いの中で生み出され、生きられた災害予兆の知識は、たくさんあったはずである。ただ、それは口承されていたため、散逸したものも多かっただろう。『山経』はそのような知識のほんの片言隻句の記述にすぎないのである。

上記の洪水や旱魃の前兆となる動物をもっと詳しく分析すれば、予兆の知識は実際の観察によるもので、中には科学的な根拠があるのを一層明らかにすることができる。

まず、「見則大旱」の蛇類は全部で5種類あり、以下の通りになっている。

太華之山：有蛇焉，名曰肥螭，六足四翼，見則天下大旱。（『西山経』）

渾夕之山：有蛇一首兩身，名曰肥遺，見則其國大旱。（『北山経』）

毋逢之山：是有大蛇，赤首白身，其音如牛，見則其邑大旱。（『北山経』）

獨山：多蜎螭，其狀如黃蛇，魚翼，出入有光，見則其邑大旱。（『東山経』）

鮮山：多鳴蛇，其狀如蛇而四翼，其音如磬，見則其邑大旱。（『中山経』）

「肥螭」は「六足」と呼ばれ、「蜎螭」は「黄蛇の如く」、「鳴蛇」は「蛇の如く」と言われるところから、それらは今日の蛇ではなく、トカゲであることがわかる。トカゲは蛇と形が似ており、近縁種類と見られるため、昔の人々に蛇とも呼ばれていた。「肥螭」には「四つの翼」、「蜎螭」には「魚の翼」、「鳴蛇」には「蛇に似ているが四つの翼」と書いてあるように、どれも翼を持っており、実はトビトカゲであることが明らかである。トビトカゲの体の両側に皮膜があるので、滑空することができる。しかも、その翼膜は魚のひれと似通っているため、『東山経』には「蜎螭に魚の翼がある」という表現が出たのだろう。

「渾夕の山」にいる1つの頭と2つの体を持つ蛇は、「肥遺」と呼ばれ、すなわち「肥螭」のことである。そして、「肥遺」や「肥螭」は同音の「委遺」、「透迤」、「委蛇」とも書く。「透迤」はくねくね動くという意味である。トカゲは蛇と同じようにくねくね動いているから、「肥遺」と名付けられたわけだろう⁹⁾。

このように、『山経』の「見則大旱」の部分に出てくる蛇類は、「毋逢の山」以外、トカゲかトビトカゲと判断してもよいようだ。トカゲは冷血

9) 現在「蜥蜴」と呼ぶのが普通だが、「蜥蜴」もまた「透迤」の発音の変化である。

動物で、陽射しや日照りが好きだが、一方、陰湿なところが嫌いである。そのため、砂漠は普通の動物には向いていないが、トカゲに気に入られる。それに、旱魃の時も、トカゲはよく姿を見せたりする。

要するに、「現れたら旱魃になる」という結論は自然現象への観察に基づいたものだと考えられる。『管子・水地篇』には「涸川之精者，生（于）鰻。鰻者一頭而兩身，其形若蛇，其長八尺，以其名呼之，可以取魚鱉，此涸川水之精也」と書いてある。「鰻」は「委蛇」のことであり、すなわちトカゲのことである。日照りが続くと、川が干上がり、「委遺」は多く見られるという。それで、「委遺」は川の神様とも見なされていたのである¹⁰⁾。

次に、「見則大旱」の鳥類だが、以下のように全部で4種類がある。

令丘之山：有鳥焉，其狀如梟，人面四目而有耳，其名曰鵩，其鳴自號也，見則天下大旱。（『南山經』）

鐘山：鼓化為鵩鳥，其狀如鵩，赤足而直喙，黃文而白首，其音如鵩，見即其邑大旱。（『西山經』）

崦嵫之山：有鳥焉，其狀如鵩而人面，雉身犬尾，其名自號也，[名曰設]（據郭注補），見則其邑大旱。（『西山經』）

柶狀之山：有鳥焉，其狀如雞而鼠毛，其名曰蜚鼠，見則其邑大旱。（『東山經』）

「鵩」は「其狀如梟（＝鵩）」、「鵩鳥」は「其狀如鵩」、「設」は「其狀如鵩」と書いてある。「鵩」は「鵩」のことで、「鵩」は「梟」と同じである。「鵩」と「鵩」はまた合わせて「鵩鵩」とも言い、「フクロウ」のことを指す。つまり、ここで取り上げられた3種類の鳥は「鵩」の形か「鵩」の形をしており、ハシタカかフクロウであることがわかる。フクロウは頭が大きい、嘴が短く、おお

きな顔は人間の顔と似ている。中には、耳の形をする羽毛が生えている種類もある。そのため、「人面」や「有耳」と呼ばれる。「見則大旱」の鳥類の4種類のうち、3種類がハシタカかフクロウ類に属するというのは、ハシタカやフクロウがネズミ類を食べ物にしていることから来ているかもしれない。

周知のように、日照りが続くとネズミはたくさん出てくる。それによって、ハシタカやフクロウも急増する。『山経』には「現れたら災害が起こる」ような鳥類は全部で13種類あり、ハシタカかフクロウに似ているのが上述の3種類のほか、『南山経』にも出る。『南山経』には「其狀如鵩而人手」の「鵩」は「見則其縣多放土」、「其狀如鵩而一足毚尾」の「跂踵」は「見則其國大疫」と記されている。『山経』における前兆となる鳥の中で、フクロウ類が半数近くを占めていることからわかるように、後世の人がフクロウを不吉な鳥と見なす理由は、フクロウが夜間に活動したり、その鳴き声が人を不安にさせたりすることにあるだけでなく、旱魃や疫病を予告することにもあるかもしれない。

「鵩」と「鵩」の出現は旱魃を予兆するが、一方、洪水を暗示する鳥類もある。『山経』には「見則大水」の鳥は2種類あり、「蜚蜚」と「勝遇」である。「蜚蜚」は「其狀如鳬，而一翼一目，相得乃飛」、「勝遇」は「其狀如翟而赤，是食魚」。「蜚蜚」は「鳬」と似ており、カモのことを指す。「一翼一目，相得乃飛」（1つの目と1つの翼しか持っていないので、雄雌2羽が並んで行動しなければならない）というのは、雄鳥と雌鳥がオシドリのように常に一緒に行動することへの誤解である。「蜚蜚」は水鳥で、「勝遇」は魚を食べる。洪水の時、「蜚蜚」と「勝遇」がよく現れるのは自然の理であるが、のちに両方とも洪水の前兆と見なされるようになった。

『山経』の「見則大旱」の動物には、獣は1つしかないが、「見則大水」の9種類のうち6種類

10) 『韓非子・説林上』には「涸澤蛇將徙，有小蛇謂大蛇曰：子行而我隨之，人以為蛇之行者耳，必有殺子，不如相銜負我以行，人以我為神君也。乃相銜負以越公道，人皆避之，曰：神君也」と書いてある。「川が干上がると、蛇は引っ越しをする」というのは、蛇が蛙類を食事に行っているため、川が干上がれば、蛇は食べ物を失ってしまい、引っ越しをしなければならなくなる。そして、引っ越しをするところを人々に見られやすい。「蛇が現れたら大旱魃になる」という言い方はここから始まっているのかもしれない。

も占めているので、獣類と洪水とのつながりに生態学的原因があると考えられる。野獣は普段山林に姿を隠している。洪水の時に頻繁に現れたりするのは、山津波によって森の中で食料が不足しているため、人間の世界に食べ物探しに来なければならないからであろう。

「見則大水」の獣には、サル目が2つあり、『南山経』における「其狀如禺而四耳」の「長右」と、『東山経』における「其狀如夸父而毳毛」の「豺山の獣」である。『説文』には「禺，母猴也」（「禺」はアカゲザルである）と書いてあり、『南山経』の郭璞の注釈には、「禺似獼猴而大，赤目長尾，今江南山中多有」（「禺」はアカゲザルのような大きさで、目が赤く、尻尾が長く、現在江南の山中に多くいる）と記されている。

『海外経』と『大荒経』にも登場する「夸父」は、太陽を追いかける伝説的な人物であるが、『山経』の中の「夸父」は、野獣の名である。『西山経』に「禺」の形をしている「舉父」という獣がいることを記されており、それに対して、郭璞は「夸父とも言う」と注釈をつけた。それゆえ、「夸父」は同じサル目の動物であることがわかる。猿は深い森に棲み、果実を食とする。洪水が頻発すれば、森の中では食べ物が足りなくなり、食べ物を探しに森を出なくては行けない。その際、人々に姿を見られ、洪水の前兆と思われるようになった次第である。そういえば、後世の人が水神を猿の形とするのも証拠のない話ではないだろう。

『山経』に記された動物の予兆知識をここで一つ一つ分析することはできないが、以上の分析によって、そのような記録はどれも理に適っており、昔の人々の自然万物に対する入念な観察と豊富な経験を反映するもので、決して空想や捏造ではないことが明らかとなった。科学は自然現象の相関性および発生メカニズムに対する観察と研究から出発している。その意味では、『山経』に記載されている霊異の匂いが漂う予兆の知識は、科学思想の芽生えと言えるだろう。妖怪と科学は、後に分かれて、不倶戴天の敵として対立するようになったが、もともとは同じ文脈の中で発生したものと考えられる。

三、兆候から象徴へ：妖怪の誕生

上古時代において、自然はまだ規律訓練や秩序化されていない野性の世界であった。深い山と谷には猛獣毒虫が姿を隠し、大きな沢や茂る草には瘴癘や竜蛇がよく現れる。水害、旱魃、疫病などがしばしば襲いかかってくるので、人間の世界はいつでも天災に崩壊させられる恐れがあった。災害を避けられるように、人々は大自然の中に潜んでいる危険と、危険発生の予兆を理解し、記録していた。それは、古代地理・博物学の重要な側面となっていたのである。

戦国時代に完成した周王朝の政治制度を反映する『周礼』という書物に、予兆の知識を収集し保存する役職について記されている。『夏官司馬』にこう書いてある。「山師，掌山林之名，辨其物與其利害，而頒之于邦國。川師，掌川沢之名，辨其物與其利害，而頒之于邦國」と。要するに、「山師」「川師」は、各地の山林、川沢を調査し、その中にいる動物の吉凶や善悪を見分け、何者が人間に有利で、何者が人間に有害であるのかを記録し、人々に知らせる仕事を担当していた。

また、『地官司徒』に「土訓，掌道地圖，以詔地事。道地慝，以辨地物而原其生，以詔地求。誦訓，掌道方志，以詔觀事。掌道方慝，以詔辟忌，以知地俗」と記されており、鄭玄は「地慝，若瘴（瘴）蠱然也」と注を入れ、鄭司農は「地慝，地所生惡物害人者，若虺蜮之屬」と注釈をつけた。それに『廣雅・釋詁』に「慝，惡也」と書いてあり、「慝」は「匿」のことで、隠れるという意味である。

そのほか、『説文』には「匿，亡也」という表現があり、『廣韻』の第5巻には「匿，藏也，微也，亡也，隱也，陰奸也」という記述がある。「地慝」とは、山林や川沢に隠れている未知の危険物のことである。洪水、峡谷、瘴氣、疫病、毒蛇、猛獣などは皆「地慝」と見られる。「土訓」「誦訓」といった官吏は吉凶を理解したり、災害から人々を守ったりするために、このような知識を習得した。その目的は、夏後氏は人々が凶悪なものに出会わないようにと鼎を造り、その上に動物を刻んで、人々に神か悪者かを教える伝説と一

貫している¹¹⁾。「土訓」「誦訓」は各地における危険物を熟知しているため、「王巡守、則夾王車」¹²⁾と言われるように、王様が出かけるとき、つねに随侍し、旅の案内をしたりしていた。山林や川沢に姿を隠している凶悪なものは、地理・博物学の記述によってこそ伝統知識の一部分となったのである。そして、『山経』に記載されている洪水や旱魃、疫病などの天災を引き起こすような鳥獣も、「地慝」や「方慝」に属すると考えられる。

『山経』にある予兆知識は経験科学の萌芽であるにもかかわらず、上古時代には、様々な現象の関連性を正確に認識する観察技術と実験手段が不足していたため、このような相関知識は自然の内在的メカニズムを探求する科学的思考に発展できず、表面的な連想や象徴的ロジックに留まっていた。

例えば、「鳳凰見則天下安寧」（『南山経』）、「鸞鳥見則天下安寧」（『西山経』）、「当康見則天下大穰」（『東山経』）のような瑞兆についての記述だが、鳳凰と鸞鳥はただ羽毛がきらびやかであるゆえ、吉祥の鳥や天下の安寧の象徴とされていたのかもしれない。『東山経』における「当康」は長い牙を持っているイノシシのことである。イノシシは農作物に悪影響を及ぼすため、農民にとって排除の対象となるはずだった。豊作の余兆と見なされるのは、「当康」という名前には縁起のいい「年豊人楽」という寓意が含まれているためである。古代人が「当康」が現れたら豊作になると考えたのは、現在、民間では大事なことがあるとき、「口彩」（おめでたい言葉）を求める習慣があるのと似たようなもので、ただその象徴的意味を取るだけの行為である。

災害は生態環境の変化を引き起こしたり、動物の異常行動を招いたりする。昔の人々は長期にわたる自然災害との戦いの中で、そのような異常現象に気がつき、自然災害の前兆として見なしていた。予兆の知識はいわゆる経験の結晶であり、根

拠があるし、理に適うし、運用もできる。

しかし、それはいったん記録され、書物の形で後世に伝えられると、状況が変わる。書面による記載は、時が経つにつれて、発生と伝播の元のコンテキストから逸脱し、元の経験という基礎から離れる。それゆえ、後世の人はいろいろ理解できなくなる。彼らは形而上学的、あるいは玄学的な視点からそのような記録を見るしかできなかった。動物と風雨、洪水、旱魃、疫病、戦争などとの間に、超自然的、かつ必然的な関係、さらには因果関係が存在していると誤解し、したがって、本来素朴だった兆候現象を神秘化して、それを神様が人間に知らせるための神秘的な記号か禎祥として見なしてしまうのである。

素朴な予兆知識は、方士や経師たちの過度な解釈によって、最終的には「天人相関説」のような神秘主義的な哲学に変わってしまった。日月の蝕、五星の変、風雲の状態、山川の変化、草木や鳥獣の異常現象、甚だしきに至っては、洋服、器物、歌謡、言葉の不条理は、すべて神秘的な意味合いを含んでいるものと見られ、天下の安定と動乱、福と災を暗示する瑞兆か凶兆として注目されていた。

『周易・系辞伝』に「天垂象，見吉凶，聖人象之」、『礼記・中庸』に「至誠之道，可以前知。國家將興，必有禎祥；國家將亡，必有妖孽」と書いてあるように、自然現象を国家興亡の兆しと見なすことは、兆候に関する解釈の玄学化を必然的に招くことになった。戦国や秦、漢の時代に、様々な兆候現象に対する認識、分類、及び解釈は、一時的に栄えた学問となり、当時の政治や思想に深い影響を与えた。それはいわゆる戦国末期に発祥し、漢代に盛んになった今文経学と讖緯経学をはじめとする「災異説」である。

『漢書』のときから、歴代の正史の中に専門的な五行志、災害志、天文志が出る。記載されていたのは禎祥変怪の話と、その話に対する経師・方

11) 『左伝』宣公3年には「使民知神奸，故民入川澤山林，不逢不若，螭魅罔兩，莫能逢之」と書いてある。

12) 「王巡守，則夾王車」は『庄子・達生』における齊桓公の物語（齊桓公は怪物を見て病気になったが、管仲は怪物を「委蛇の神」と説明し、治してあげた）を思い出させてくれる。また、『史記・秦始皇本紀』に始皇帝が旅する時の話がある。「浮江，至湘山祠。逢大风，几不得渡。上问博士曰：“湘君神？”博士对曰：“闻之，尧女，舜之妻，而葬此。”」つまり、始皇帝が旅する時、左右に各地の風土習俗がよくわかる「博士」がいたことがわかる。その「博士」は『周礼』の中の「土訓」と同じ役職である。

士たちの解説である。『漢書・五行志』の班固の序文には「漢興，承秦滅學之後，景、武之世，董仲舒治《公羊春秋》，始推陰陽，為儒者宗。宣、元之後，劉向治《谷梁春秋》，數其禍福，傳以《洪範》，與仲舒錯。至向子歆治《左氏》，傳其《春秋》，意亦已乖矣，言《五行傳》，又頗不同。是以摭仲舒，別向、歆，傳載眭孟、夏侯勝、京房、谷永、李尋之徒所陳行事，訖于王莽，舉十二世，以傳《春秋》，著於篇」と書いてあり、当時の五行説の隆盛ぶりがうかがえる。漢代の人が、『尚書・洪範』の中の「初一日五行，……一日水，二曰火，三曰木，四曰金，五曰土」という内容を手掛かりとし、五行相克説で禎祥変怪のことを理解していたため、班固は『五行志』と名付けたわけである。

『漢書・五行志』は各流派の学説を引用し、春秋時代数百年の間や秦・西漢の時代に起こった災害と異常現状を一つ一つ解説し、しかも当時の政治事件に付会していた。例えば、『春秋』昭公25年に「有鸛鵒來巢」（鸛鵒が巣作りに来る）が記載されていた。「鸛鵒」は「鵒鵒」とも言い、今「ハッカチョウ」（ハッカチョウ）と呼ばれる。ハッカチョウは主に中国の南地方に出没し、北の方にはあまり姿を現わさないから、『列子・湯問』に「鸛鵒不踰濟」（鸛鵒が済水を越えない）という話があった。ハッカチョウが北の方の曲阜に出現し、しかも巣を作るのは異常現象と言えるため、魯国の史官はそれを記録したが、深意があるわけではない。その点は『公羊伝』の記載によっても証明されている。「有鸛鵒來巢。何以書？ 記異也。何異爾？ 非中國之禽也」と書いてあるように、史書の執筆は基本的に慣れ親しんでいることを記載せず、突然の出来事や異常な現象に注目し、記載することになっている。

ところが、偶然同じ年に、魯昭公が季氏との戦いに負け、出奔した。『春秋』（25年）に「九月，巳月己亥，公孫于齊」とその件についての記録がある。同年、『左伝』には「有鸛鵒來巢，書所無也。師己曰：『異哉！吾聞文、成之世童謠有之曰：鵒之鵒之，公出辱之。鵒鵒之羽，公在外野。往饋之馬，鵒鵒跕跕。公在幹侯，征褻與糲。鵒鵒之巢，遠哉遙遙。稠父喪勞，宋父以驕。鵒鵒鵒鵒，往歌來哭。童謠有是，今鵒鵒來巢，其將及

乎」と記されており、「鸛鵒の巣作り」と「魯昭公の出奔」とが関連づけられた。『左伝』の中の童謠は、当時季氏が魯昭公を追放するための世論操作だったかもしれない。そして、『左伝』ではすでに2つの件が結びつけられたため、漢代になると、微言大義が好きな経学者たちは当然それをさらに敷衍していくのであった。例えば、『漢書・五行志』に劉向と劉歆（父子）の以下の話が記録されている。

昭公二十五年“夏，有鵒鵒來巢”。劉歆以為羽蟲之孽，其色黑，又黑祥也，視不明、聽不聽之罰也。劉向以為“有蜚”、“有蠱”不言“來”者，氣所生，所謂眚也，鵒鵒言“來”者，氣所致，所謂祥也；鵒鵒，夷狄穴藏之禽，來至中國，不穴而巢，陰居陽位，象季氏將逐昭公、去宮室而居外野也；鵒鵒白羽，旱之祥也；穴居而好水，黑色，為主急之應也；天戒若曰：“既失眾，不可急暴；急暴，陰將持節陽以逐爾，去宮室而居外野矣。”昭不寤，而舉兵圍季氏，為季氏所敗，出奔于齊，遂死於外野。董仲舒指略同。

鸛鵒が巣作りに来るのは自然現象にすぎず、昭公の逃亡とは無関係だった。『左伝』に記された魯国の童謠も一時的なうわさで、根拠のある話ではなかった。しかし、牽強付会と言ってもいいように、劉向と劉歆は陰陽五行説という玄学の理論を通して、「鸛鵒の巣作り」と「魯昭公の出奔」の両説を強引に、しかも確実に結びつけた。言い換えれば、劉氏父子のその解釈によって、「鸛鵒の巣作り」という自然現象と「魯昭公の出奔」という政治事件が密接に結びつくようになった。それで、ハッカチョウというよく目立たない小鳥が本来持っていなかった霊力を付与されるようになり、ハッカチョウの出現は魯国の政治的動乱を引き起こしたと思われるようになった。要するに、ハッカチョウは本場の妖怪に変身したのである。

『漢書・芸文志』には、このような陰陽五行説で自然現象を政治事件に付会する「災異説」的なディスコースがたくさんある。単純な自然現象だったものが政治的意義を与えられ、象徴的な禎祥・災害現象に変わるのである。そのため、『漢

書・芸文志』は漢代の「政治妖怪学」の集大成とも言える。

『漢書・五行志』は、最初の禎祥・災害現象の集合として、劉向、劉歆父子の言論をたくさん収録した。すなわち、劉向と劉歆は漢代の「政治妖怪学」の大物と言えよう。劉向と劉歆は相次いで『山海經』の整理の仕事を命じられた。『山海經』の中の靈異に関する記録はきっと彼らの注目を引いたのだろう。『漢書・芸文志』は劉向が校正した書物のリスト『別録』に基づいて編纂されたものである。劉向は図書を7種類に分けたが、「術数」はその中の一つである。「術数」の分野に属する天文家、五行家、雜占家、形法家の多くは禎祥・災害の学説と関係があり、『山海經』も形法家の中に入る。『漢書・芸文志』に「形法者、大舉九州之勢以立城郭室舍，形人及六畜骨法之度數、器物之形容以求其聲氣貴賤吉凶」と書いてあるように、形法の術は、物事の形によって善惡吉凶を判断するものである。そこから、禎祥・災害を論じるのが好きな劉向が、『山海經』を「禎祥の書」と見なしていたことがわかる。

そして、劉歆は、父親である劉向の『山海經』に対する見方を引き継いだ。劉歆は「上山海經表」を上奏し、『山海經』の内容について、「内別五方之山，外分八方之海，紀其珍寶奇物，異方之所生，水土草木，禽獸昆蟲麟鳳之所止，禎祥之所隱，及四海之外，絕域之國，殊類之人」と言い、『山海經』の機能については、「文學大儒，皆讀學以為奇，可以考禎祥變怪之物，見遠國異人之謠俗」と述べた。「禎祥之所隱」、「禎祥變怪之物」とは、『山經』における「見則天下大水」、「見則天下大旱」、「見則郡國大病」、「見則有兵」などの鳥獸のことを指す。劉歆は「禎祥變怪」と言ったのは、彼がまさに災異説の視点からそのような記録を見ており、知識の素朴な意味と元の経験を理解できなくなったことを表明している。

劉歆は『山海經』を「禎祥變怪」の書と見ていた。それに、『芸文志』の術数略の雜占類の中に

『禎祥變怪』が21巻ある。同類には、ほかにも『人鬼精物六畜變怪』が21巻あり、『變怪詰咎』13巻がある。書名に皆「變怪」があるのは、禎祥變怪が動物と関連していること、つまり、劉歆が様々な動物の異常現象（變怪）を兆候として、吉凶禍福を解説していることを暗示している。そのうえ、『人鬼精物六畜變怪』の書名は、劉歆が動物（六畜）の変化を、『山經』のように単なる自然現象として扱うのではなく、鬼や怪異などの不思議な現象と同列に論じることを示している。そこから、劉向と劉歆の知識分類のシステムにおいて、『山海經』は妖怪書物と同類になっていたことがうかがえる。

睡虎地秦簡『日書』の中の「詰篇」¹³⁾の内容からわかるように、このような「禎祥變怪」の觀念は、後世の怪奇小説の中の妖怪や奇なものを育む母胎となった。『左伝』（宣公15年）における「天反時為災，地反物為妖，民反德為亂」や『論衡・自紀』における「夫氣無漸而卒至曰變，物無類而妄生曰異，不常有而忽見曰妖，詭於眾而突出曰怪」の記録のように、妖と怪は、本来、不条理で人々を不安にさせる異常現象のことを指していた。

この意味では、『山經』の中の「○○鳥獸が現れたら天災が起こる」というような予兆知識や靈異記録は、妖怪・怪異の觀念の源であると言える。すなわち、後世の精氣の変化や、物が妖になり、妖が人に化ける妖怪・怪異觀念は、このような本来、普通の前兆となる異常現象から変容してきたものである。それゆえ、『山海經』という本は、まさに「怪奇小説の祖」と言えよう。

ただ、今日の人々は『山海經』を読む際、表面だけを見たり、本の中に記載された九頭の蛇や九尾の狐の話だけに興味を持ったりしている。『山海經』の世界を生きていた人々の目から正常と靈異を見ることができないため、かえって『山海經』に含まれている本来の意味での「妖怪」現象が見えなくなっているのである。

13) 張伝東『睡虎地秦簡「詰篇」與六朝志怪小説の淵源關係』、『齊魯學刊』2017年第1期。

Birth of Demons: Spiritual Animals in *The Classic of Mountains and Seas*

ABSTRACT

Abstract: The concept of demons in traditional culture and folk beliefs is attested as far back as ancient times. Demons are often associated with catastrophes, relating to oddities and anomalies that may presage disasters. *The Classic of Mountains and Seas* records dozens of spiritual animals that can cause natural and man-made disasters once they appear, embodying this original concept of demons. This paper argues that such supernatural records actually represent empirical knowledge accumulated by the ancient Chinese over the long period of their disaster prevention and relief practice, reflecting an ecological correlation between animal behavior and natural disasters. However, once this knowledge has been separated from its basis in experience and has been construed in the light of the doctrines of divine-human telepathy and divine catastrophe, the relevant animals come to be assigned supernatural powers that no longer reflect their original properties, grounded in nature, and become demons in the true sense of the term.

Key Words: demons, propitious signs, *The Classic of Mountains and Seas*, *Records of the Five Elements*